

意見を伝えること

五年 Y・T

私は、この夏休みに学校の短期留学プログラムに参加しました。オーストラリアで三番目に大きい都市ブリスベンを訪れました。その町にあるモートンベイカレッジという恵泉と同じキリスト教主義の女子高に通いました。また、ブリスベンの近くにあるゴールドコーストという都市にも数日滞在しました。約二週間の滞在を通じて実際に海外の生活を経験すること、それを私の将来の選択に活かしたいと思ったこと、日本とは異なる文化を経験し自分の考えを広げたいという三つの思いを持って参加しました。留学の準備を進めるうちに、何のものにも代えられない楽しみの気持ちと反する二つの気持ちがありました。一つ目は、単純に二週間無事に海外で生活することが出来るのかという心配な気持ちです。二つ目に、オーストラリアで出会う人にとって、私の行動が日本人全体としての印象を与えてしまうのではないかという不安や恐れのお気持ちです。

七月二十四日真夏の蒸し暑い成田空港を出発し、翌日の早朝、南半球のやや肌寒いゴールドコーストの空港に着きました。目の前に広がる広大な自然を見ると心がすっきりと洗われるような気がしました。人間が昔からある自然の中で生活させてもらっているという印象を受けました。

その日の夕方は、ホストファミリーに初めて会いました。上手く生活できるかという不安な気持ちは消え、直感的に楽しく過せる気がしました。初めはオーストラリアのアクセントと会話のスピードについていけず、コミュニケーションが難しかったですが、次第に慣れていきました。

ホストブラザーは日本人の友人を持っていました。そのことから日本への関心も高く、日本について話す機会が多くありました。その時、私は日本についてあまり自信をもって答えられませんでした。オーストラリアは日本に比べ歴史の浅い国とはいうものの、自分たちの国を誇りに思い、大切にしようとしているように感じました。彼らとの会話から、海外の文化を理解することと同じくらい、もっと日本の伝統文化にも注目し大切にすべきだということ学びました。

生活しているうちに、二国間の文化や考え方の違いを感じることもありました。最も印象的だったことは、家族の在り方です。第一に、子供も家族の一員でありきちんと自分の役割を担っていました。例えば、ホストシスターは食卓

の準備、ホストブラザーは食後の後片付けの役割があります。十四歳からお金を稼ぐということよりも、社会に出るための準備という目的を主として、家の外でも「仕事」に就けるそうです。日本ではお手伝いに区分されることも、「仕事」という言い方をすることで、子供にも自分は社会の一部分を担っていると実感させ、将来本格的に「仕事」に就いた時にその経験が役立つのです。第二に、家で過ごす大半を家族団欒の時間にあてていました。家族同士でコミュニケーションをたくさん取り、その日の出来事を共有していました。家族の出来事も自分の出来事に加えて一日が完成しているように感じました。暖かい陽が注ぐ気持ちの良い朝も、「おはよう」の挨拶にも何か一言加えて、一日が始まります。日本で毎朝時間を気にしながら支度をする私にとっては新鮮でした。何よりも、オーストラリアは家族の絆が深いように感じました。離れて暮らす家族にもこまめに連絡を取ったり、幼い子供の面倒を見たりと、自分が助けるときもあれば、周りの人に支えてもらうときもある、まさに思いやりの気持ちを大切にしていると感じました。

この貴重で充実した約二週間を経験したことにより、自分の意見をしっかりと相手に伝えることの大切さを学びました。相手とコミュニケーションを取りたい、相手の考えを理解したい、相手の文化を学びたいと思っているだけでは、結局何も得られません。自分から何か行動を起こさなければいけません。これは以前から頭では理解していたし、私も役員として携わる信和会のテーマにしたこともありました。けれども、私は周りに頼ってしまい、なかなか行動に移せていませんでした。今回初めて、ホストファミリーと私だけ、会話をするには英語が不可欠という環境を体験したことでこの重要性が身に染みて分かりました。私自身、そんなに口数が多い方ではないと思いますし、日本には多くを語らず判断は相手に委ねるといった考えが良いとされる風習があります。しかし、世界では、この価値観を理解する人はそんなに多くないことも分かりました。

先日ノーベル平和賞をパキスタン出身のマララさんが受賞しました。もし、留学を経験していなければ、同い年の彼女がノーベル賞を受賞したという喜ばしいニュースとして受け取り、忙しい日々の中で頭の片隅に流されてしまったかもしれません。ですが、今年の夏に意見をきちんと伝える重要性を学んだことにより、事実だけでなく、それ以上の何かハッと目覚めさせられる刺激がありました。なぜなら、彼女は、女性を取り巻く環境を変えるために、タリバンによる銃の攻撃を受けた後も屈せず、活動を続けているからです。何かおかし

い、賛成できない、ということに対し自分から行動すべきだ、自分には無理だと思わず、声を上げて良いということ、彼女の行動が教えてくれました。行動のその先には、小さくても変化があり、それがなくても今後の変化のきっかけになるかもしれないからです。

留学を経験して、場所が赤道を挟むくらい離れていても、言語が違っていても心を通わすことが出来ると分かりました。その一方で、私たちは一人一人の価値観を持っています。時にはそれを巡って衝突することさえあります。私は、人との関わり方を自分のものさしで決めつけてしまっていると感じることがあります。自分の意見がその場をややこしくさせると感じる時は、矛盾する二つの気持ちを持ち合わせます。包み隠さず意見を言ってしまう気持ちと、人と争うことを面倒だと考えそれを避けたい気持ちです。そんな時、大抵当たり障りのないことを言ってその場を終えてしまいます。特に心を許していない人には私が考えている全てのことを、悟られたくないのです。だから、私は誰にでも自分の気持ちをさらけ出すのが苦手なのです。

私は、相手にNoということをしづつしてしまいます。しかし、外国ではYesとNoをはっきりさせることが求められます。YesとNoと聞くと、一年生の時に、担任の先生から、「河井先生はYesとNoをはっきり言える人になりなさいとおっしゃられた。」と伺ったことを思い出します。当時は、文字通りの意味にしか捉えられませんでした。けれども、Noと言うには、自分で考えていないと言うことが出来ません。Noと言うは決して悪いことではない、それより自分の考えを伝えられない方つまり、事なかれ主義がいけないのだということが四年以上たってやっと分かってきました。

今回の留学では、当初の目的を果たせたこともあります。さらに新しい目標も与えられました。いつも様々な方向にアンテナを張り、誰かの意見に流されるのではなく、自分で考えることを怠らない人になりたいと思います。そう思わせてくれたきっかけとなった留学でした。この新たに見つけた目標を達成できるように残り一年半をきった恵泉生活とその後の進路をしっかりと歩んで行きたいと思いました。